

知財×生成AIの進化：2025年（効率化）から2026年（創造）へのパラダイムシフト

2025年：効率化の主役 (Efficiency Leader)

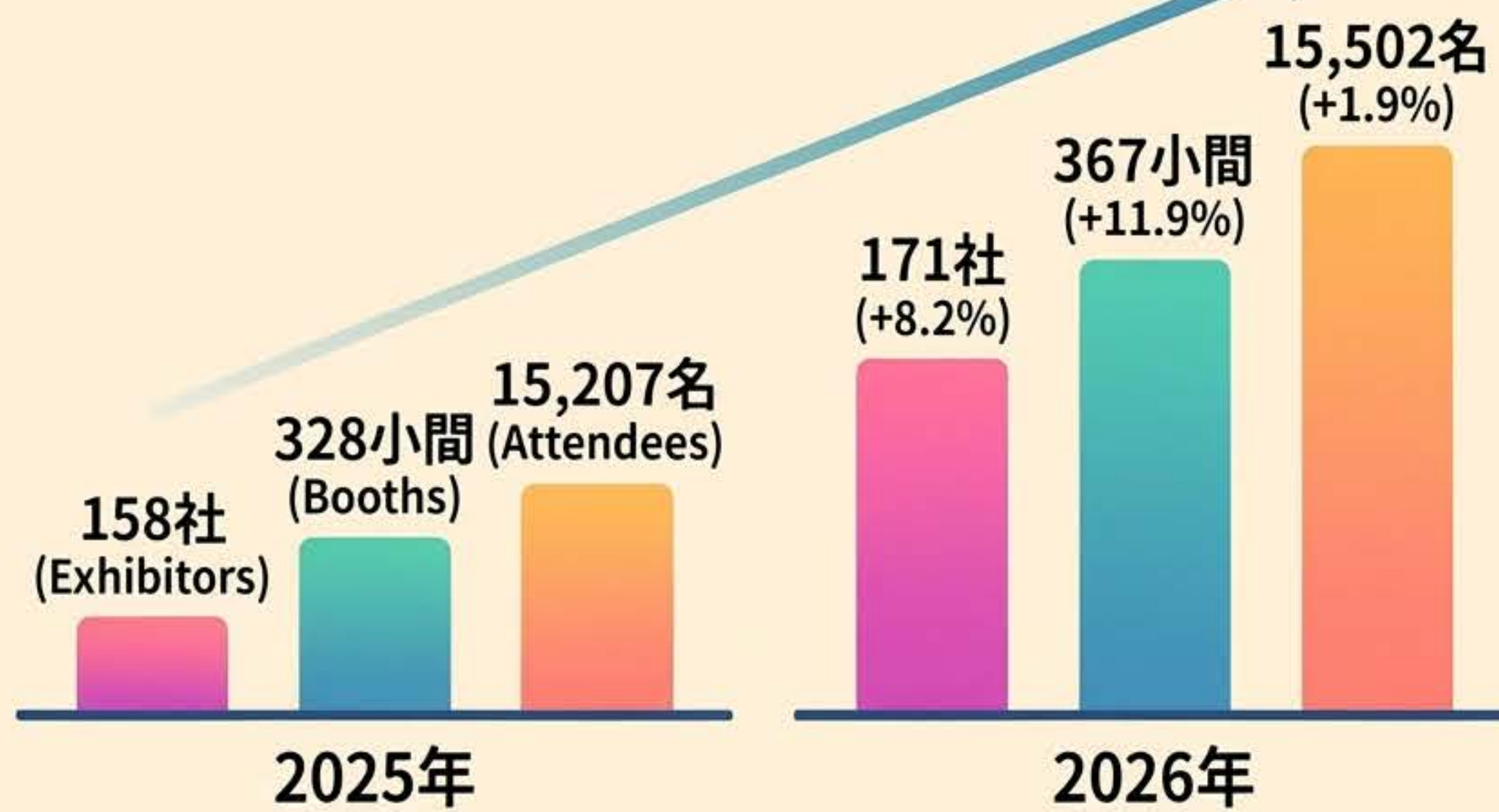


- 生成AIが「主役」から「前提」へ：効率化が注目されたが、2026年はAI活用が当たり前の基盤となった。

単発チャット・調査自動化
(Single Chat / Search Automation)

効率化へのシフト
調査時間の短縮

市場規模の拡大



過去最大規模へ拡大する市場：出展社数は前年比8.2%増、小間数は11.9%増と、知財AIへの投資が加速。

2026年：価値創造の基盤 (Foundation for Value Creation)

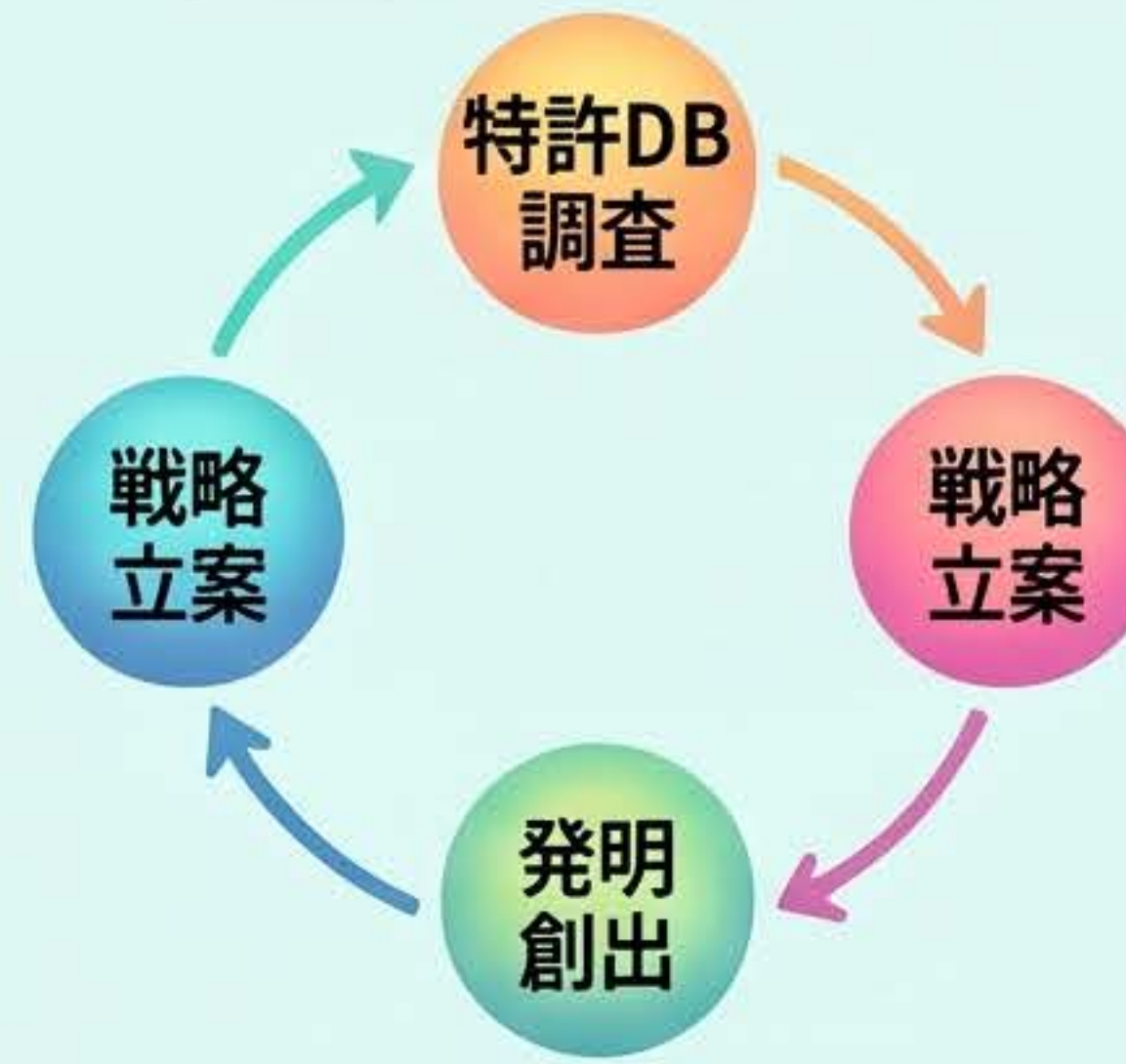


- 「効率化」から「価値創造」へのシフト：調査時間の短縮だけでなく、0→1のアイデア発想や発明の質向上へと目的が変化。

AIエージェント・MCP連携

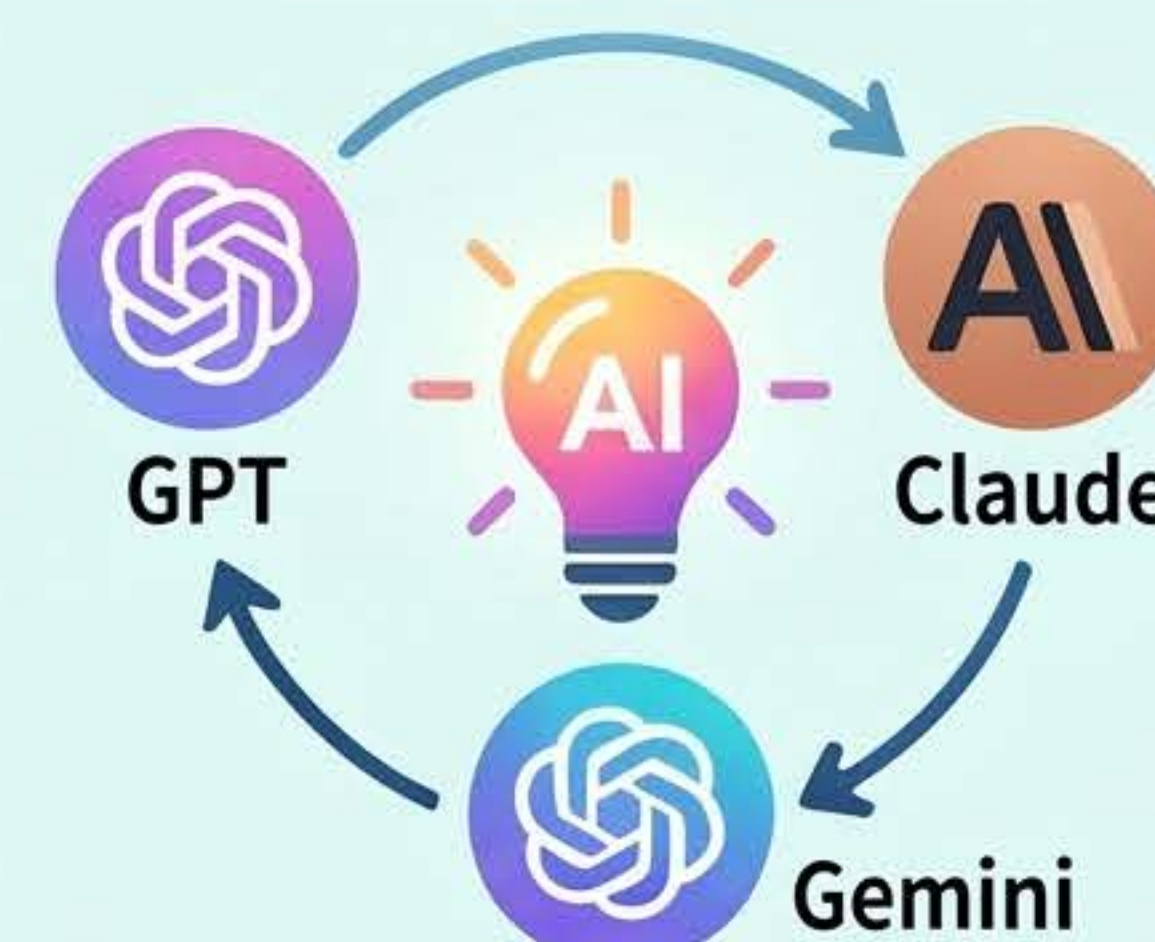
MCP連携により、価値創造へのシフト
調査時間の短縮だけでなく、0→1のアイデア発想や発明の質向上へと目的が変化。

一気通貫エージェント



一気通貫エージェント
MCP連携により、特許DB調査から戦略立案までをAIが自律的に実行。

マルチLLMによる「合議型」発明創出



5分で周辺特許群を自動生成 (Auto-generate Related Patents in 5 Mins)

ターゲットの変化



知財部から「R&D・経営層」へ拡大
ターゲットが専門職から、事業創造を担う部門や経営の中核へと広がった。